

ISSN 2186 – 3989

「女性を対象とした結婚に関するオンライン調査
(J-WAMs)」の結果報告

相原 征代、後藤 和史、ハーモン デニス
吉岡 剛彦、土屋 明広、中山 佳子

J-WAMs Report (Survey on Japanese Women's Attitudes toward Marriage)

Masayo Aihara, Kazufumi Gotow, Dennis Harmon II
Takehiko Yoshioka, Akihiro Tsuchiya, Kako Nakayama

北 陸 大 学 紀 要
第55号(2023年9月)抜刷

「女性を対象とした結婚に関するオンライン調査 (J-WAMs)」の結果報告

相原 征代*、後藤 和史*、ハーモン デニス**

吉岡 剛彦***、土屋 明広****、中山 佳子*****

J-WAMs Report (Survey on Japanese Women's Attitudes toward Marriage)

Masayo Aihara*, Kazufumi Gotow*, Dennis Harmon II**
Takehiko Yoshioka***, Akihiro Tsuchiya****, Kako Nakayama*****

Received August 4, 2023

Abstract

This paper discusses the results of an online questionnaire conducted in 2022 on Japanese women's attitudes toward marriage (J-WAMs). This is a preliminary study for developing a marriage index (Maridex) to analyze the discriminatory structure of the marriage system in Japan. While it is widely recognized that social systems and structures have an impact on discrimination against women, we must consider structural factors other than modern capitalism and industrialization as the cause of this discrimination in Japan. We assume that one of the causes of this discrimination in Japan is in the marriage system; and that the marriage system itself reproduces discrimination against women. Japanese cultural norms and ways of thinking about love and marriage supports this discrimination system. The preliminary survey targeted 560 women aged 20 to 59 and inquired on participants demographic characteristics, their views on marriage and income, their reasons for marriage, and their associations with love and marriage. The data was analyzed using descriptive statistics, regression analysis, and text mining. The results show the uniqueness of the responses of participants in their 20s compared to other age groups, and significant differences depending on marital status, such as: married, divorced, and single. For people in their 20s, "shotgun marriages (Deki-kon)" will be a "normal" reason of marriage (in 1990's, it was not "normal marriage"), simply because there are many couples who marry "after having a baby." While there are young people who are concerned about the financial burden

* 北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

** 公立小松大学国際文化交流学部 Faculty of Intercultural Communication, Komatsu University

*** 佐賀大学教育学部 Faculty of Education, Saga University

**** 金沢大学人間社会研究域学校教育系 School of Teachers Education, College of Human and Social Sciences, Kanazawa University

***** 名古屋大学未来社会創造機構モビリティ社会研究所 Institutes of Innovation for Future Society, Global Research Institute for Mobility in Society, Nagoya University

of marriage, there are also those who feel “benefits other than money” regarding marriage. This paper examines these diversities of views and opinions on marriage varied by status and age groups.

Key Words : Maridex, Japan’s marriage system, gender discrimination, gender studies

要約

女性差別に社会制度や構造が影響していることは広く認識されているが、日本においていまだに女性が差別されている状況については、近代資本主義や産業化「以外」のところに構造的要因があると考えざるを得ない。日本における女性の差別状況の原因を、「結婚制度」にあると仮定し、「結婚制度の存続自体が女性差別を再生産」しており、その制度を支える恋愛・結婚への考え方そのものが女性差別の原因であるとする。そしてその恋愛・結婚に関する価値観のどの部分が女性差別の源泉となっているかを、指標（「Maridex」）を作って検証する、というのが最終目標であるが、本論文は 2022 年度に実施した、その指標 Maridex 作成のために実施した予備調査（20～59 歳女性 560 名対象）の結果分析である。

全体の傾向としては、多くの質問で 20 代の回答が他の年代の傾向と比べて特異的であること、既婚・離婚／独身という結婚ステータスによって有意差がみられることが多い、ということである。まわりに「でき婚」が多かった 20 代は、「子どもができたから」結婚することを普通だと思っている可能性がある。また、結婚への金銭的負担の懸念が大きい若者がいる一方で、結婚すると「金銭面以外の利点」を実感するというような、「日本の結婚の姿」も見えてきた。

キーワード : Maridex、結婚制度、女性差別、ジェンダー

はじめに-問題の所在

女性差別に社会制度や構造が影響していることは広く認識されている。上野『家父長制と資本制』（1990）によると、差別の根源は、近代資本主義だけでも、また家父長制だけでもなく、両者の重なりあったところにあるものこそが、近代産業社会に固有の女性差別の根源であるとした。イリイチ『シャドウ・ワーク』（Illich, 1981, 邦訳 2006）によると、本来資本主義に必要である再生産労働を女性に押し付け、それを労働市場から「排除」して「シャドウ・ワーク」としたことによって、女性が二流の人間とされた、としている。ブルジョワ階級がいわゆる「近代家族」を形成したことにより、女性が「私的領域」に閉じ込められたことが、女性や子どもを「公的領域」から守ることになった（Giddens, 1992 など）一方で、女性の社会進出が疎外されたことは多くの研究者によって指摘されている。このように、近代資本主義と産業化によって、再生産を担った女性が労働市場から排除され、社会的構造や制度そのものが女性の社会進出を阻んできた歴史的事実についてはおおむね認められていると言ってよい。

しかし、「日本において」いまだに女性が差別されている状況については、近代資本主義や産業化「以外」のところに構造的要因があると考えざるを得ない。その理由としては、①近代化や資本主義、産業化が欧米諸国にくらべて「遅れている」と言われていたが、同じように「遅れてきた国」であるドイツやイタリアと比べても、日本は著しく女性の地位が低いこと（World Economic Forum, 2022: ジェンダーギャップ指数においてドイツは 146 か国中 10 位、イタリアは 63 位、日本は 116 位）、②欧米では基督教の影響による女性差別の影響が少なくなかったが、日本ではそのような基督教の影響は限定的だったこと、③また、②に関連して、日

本には明治期以降に欧米から「良妻賢母」や「妻の貞淑」などの考え方（そして結果として、女性の社会進出を阻むことになった考え方）が輸入されたとされ、一般には江戸時期にはこれらの女性差別的な考え方が少なかった、と解釈されているにもかかわらず、日本においてこれらの考え方が欧米より強く支持されているということが挙げられる。この女性差別における日本的特徴については、東アジア文化圏の儒教的影響を指摘する研究者も多いが、果たしてそのような「歴史・文化的事実」だけに原因を求めている十分なものであろうか。

本研究では、そのような日本における女性の差別状況の原因を、「結婚制度」にあると仮定する。筆者による先行研究によると、結婚はそもそも「男女不平等」を前提としており、クルマの運転手が一人しかいないように、家族内における夫婦の役割は「運転手—助手席」のような不対称なものにならざるを得ず、その認識を踏まえない男女共同参画への施策は効果がないことを示唆した（相原, 2016）。この先行研究をもとにして、「結婚制度の存続自体が女性差別を再生産」しており、その制度を支える恋愛・結婚への考え方そのものが女性差別の原因である、と考えている。そしてその恋愛・結婚に関する価値観のどの部分が女性差別の源泉となっているかを、指標（「Maridex」）を作って検証する、というのが本研究の最終目標である。

女性の差別解消の取り組みについては、さまざまな研究が進んでいるが、政策としては「女性管理職・上位職の拡大（数値目標含む）」、学術的研究においては「アンコンシャス・バイアス（unconscious bias: 無意識の偏見）」の指摘が主なものである。本研究はその研究動向の中では、「日本の女性差別の根源的な原因を、恋愛を含む結婚への意識に求める」という、アンコンシャス・バイアスに近いアプローチである。ただし、アンコンシャス・バイアスに近いアプローチの中には、心理学的アプローチに代表されるように「個人の意識の傾向」を見るものも多いが、本研究は、人が無意識に抱いてしまうものの見方や捉え方のゆがみや偏りを暴くのではなく、社会的に作られる恋愛・結婚に関する「価値観」（例えば、「女性にとって結婚とは幸せである」など）のなかにその差別構造を見出し、その「差別的な価値観」の上に「結婚制度」が成り立ち、結婚制度の存続が女性差別を再生産している、と仮定している。結婚が「経済的に」女性を労働市場において不利な立場に置くことは間違いないとしても、実際には「アンコンシャス・バイアス」や個人の考え方だけが原因なのではなく、「結婚とはそういうものであり、それが嫌ならば結婚しなければいい」という選択肢しかない結婚制度（とそれを支える社会状況）が問題なのだ、という立場をとる。

本論文では、その結婚制度の差別構造を分析する指標「Maridex」を作成するために 2022 年度（2023 年 2 月）に実施した予備調査結果の分析を紹介する。

方法

20 歳から 59 歳までの女性 560 名に対するウェブ調査を行った。研究計画については北陸大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：2022-9）。

具体的には、セルフ型アンケートツールの QiQUMO（株式会社クロス・マーケティング）を用いて調査フォームを作成した（質問項目は論文末の資料を参照）。そして 2023 年 2 月にクロス・マーケティング社の保有するパネルのうちから日本国内に居住する 20 代～50 代の女性モニター各 140 名ずつ計 560 名に回答を依頼した。なお、得られたデータには回答データに加えてモニターの性別、年齢、年代、居住地、職業が調査会社から提供されていた。

得られた回答の中には調査会社から提供された年齢と回答した年代が大幅に異なるなど回答態度に疑義のあるものが見られたため事後の分析からは除外し、528 名のデータを分析対象とした（Table 1）。

Table 1

ウェブ調査回答詳細（年代別）

	20代	30代	40代	50代	合計
疑義なし	132	128	131	136	528
疑義あり	7	12	9	4	32
合計	140	140	140	140	560

結果

統計解析には HAD (ver17.206; 清水, 2016) および KH Coder (ver3.Beta.05a; 樋口, 2004) を用いた。

1) 人口統計学的情報

年齢 年代別の年齢分布を Figure 1 に箱ヒゲ図として示した。年代別の平均値は 20 代から順に 25.74、34.58、44.41、54.07 であった。一様分布を想定した時の期待値は 24.5、34.5... となることから、これら期待値を基準値とした 1 標本 t 検定を行ったところ 20 代の平均年齢が有意に高いことが示唆された ($t(132)=5.498, p<.001$)。

居住地域 東京都 73 名、大阪府 49 名、神奈川県 46 名、北海道 42 名など人口が多いあるいは大都市圏を持つ都道府県で回答者が多く、鳥取県、愛媛県、佐賀県、大分県（各 2 名）など人口の少ない県で回答者が少なかった。

職業ステータス 会社勤務（一般社員）141 名、パート・アルバイト 118 名、派遣社員・契約社員など何らかの形で収入を得ている女性が 358 名、専業主婦 105 名、学生 21 名、無職 44 名など収入を得ていない女性が 170 名であった。

結婚・子ども 結婚ステータスに関しては、独身 228 名、既婚（離婚歴なし）252 名、離婚歴あり 48 名であった (Table 2)。また、既婚・離婚群 300 名に関して、子の人数を 18 歳未満および 18 歳以上に分けて Table 3 および Table 4 に示した。

学歴 最終学歴は大学 198 名と最も多く、高等学校 156 名、短期大学 61 名と続いた。

収入 学生を除いた世帯収入については、301～500 万円が 113 名と最も多く、若干高収入寄りの釣り鐘型分布を示していた (Table 5)。一方、自身の収入については 101～300 万円が 131 名と最も多いが、収入なし 93 名、100 万円以下 93 名と、収入に関する回答が得られた 73.7% が 300 万円未満であった。

Figure 1
年代別年齢分布

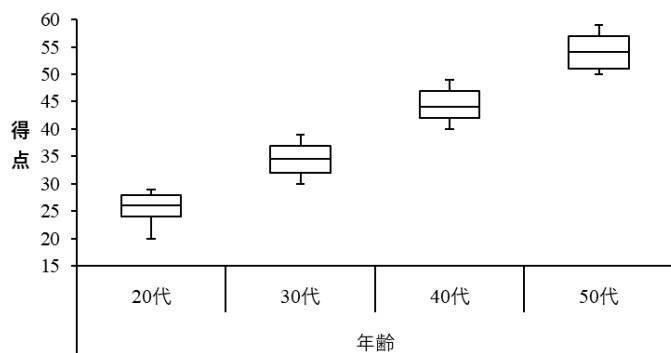


Table 2
結婚ステータス (年代別)

	20代	30代	40代	50代	合計
独身	99	54	48	27	228
既婚 (離婚歴なし)	32	69	66	85	252
離婚歴あり	2	5	17	24	48
合計	133	128	131	136	528

Table 3
18歳未満の子どもの数 (既婚・離婚群)

18歳未満	20代	30代	40代	50代	合計
なし	16	23	30	84	153
1名以上	18	51	53	25	147
合計	34	74	83	109	300

Table 4
18歳以上の子どもの数 (既婚・離婚群)

18歳以上	20代	30代	40代	50代	合計
なし	34	72	59	34	199
1名以上	0	2	24	75	101
合計	34	74	83	109	300

Table 5

世帯収入および自身収入（学生除く）

	世帯収入	自身収入
収入はない	16	93
100万円以下	27	93
101-300万円	73	131
301-500万円	113	80
501-700万円	63	25
701-1000万円未満	48	4
1000万円以上	44	4
わからない・答えたくない	123	77

2) 結婚と収入をめぐる態度

年代と結婚経験の有無（既婚・離婚 vs. 独身）で分割して多元クロス表を作成した（Table 6、7）。「経済的に全く不自由のない生活が保証される場合、性格が合わない相手とでも結婚したい」について、年齢、結婚経験（既婚・離婚 vs. 独身）および交互作用を独立変数、回答（ダミー変数：はい=1, いいえ=0）を従属変数として頑健標準誤差を使用した重回帰分析を行った。その結果、年齢（ $\beta=-.099, p=.014$ ）および結婚経験（ $\beta=.231, p<.001$ ）が有意な正の影響を与えており、年齢が進むにつれて肯定率が低くなり、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向がうかがえた。「もし、あなたに十分な収入があり、パートナー（夫）が専業主夫になりたいと言い出したら、どうしますか」も同様に分析したところ、結婚経験が有意であり（ $\beta=.122, p=.011$ ）、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向がうかがえた。

Table 6

経済的に全く不自由のない生活が保証される場合、性格が合わない相手とでも結婚したい

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	27	59	68	98	252
	はい	7	15	15	11	48
独身	いいえ	96	48	48	27	219
	はい	3	6	0	0	9
合計		133	128	131	136	528

Table 7

もし、あなたに十分な収入があり、パートナー（夫）が専業主夫になりたいと言い出したら、どうしますか

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	反対する・拒否する	10	35	35	50	130
	賛成する・受け入れる	24	39	48	59	170
独身	反対する・拒否する	49	29	30	13	121
	賛成する・受け入れる	50	25	18	14	107
合計		133	128	131	136	528

3) 結婚に対する態度

年代と結婚経験の有無で分割して多元クロス表を作成した (Table 8~10)。先節と同様のモデルで重回帰分析を行ったところ、「パートナー・夫（になる人）に、雨の日には疲れていても駅まで迎えに来てほしい」「パートナー・夫（になる人）を得ることで、自分の人生の幸福の半分以上は得られる」では、結婚経験が有意な正の影響を与えており（それぞれ、 $\beta=.120$, $p=.012$; $\beta=.257$, $p<.001$ ）、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向がうかがえた。一方、「パートナー・夫（になる人）と離婚することもありえる」では結婚経験が有意な負の影響を与えており ($\beta=-.250$, $p<.001$)、結婚経験があると肯定率が低くなる傾向がうかがえた。

Table 8

パートナー・夫（になる人）に、雨の日には疲れていても駅まで迎えに来てほしい

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	25	56	63	81	225
	はい	9	18	20	28	75
独身	いいえ	88	44	41	23	196
	はい	11	10	7	4	32
合計		133	128	131	136	528

Table 9

パートナー・夫（になる人）を得ることで、自分の人生の幸福の半分以上は得られる

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	13	24	36	52	125
	はい	21	50	47	57	175
独身	いいえ	60	35	37	15	147
	はい	39	19	11	12	81
合計		133	128	131	136	528

Table 10

パートナー・夫（になる人）と離婚することもありえる

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	15	34	44	40	133
	はい	19	40	39	69	167
独身	いいえ	30	9	12	3	54
	はい	69	45	36	24	174
合計		133	128	131	136	528

4) 結婚の理由

年代と結婚経験の有無（既婚・離婚 vs. 独身）で分割して多元クロス表を作成した（Table 11～16）。先節と同様のモデルで重回帰分析を行ったところ、「年齢」および「子どもができたので」では、年齢が有意な負の影響（ $\beta=-.119, p=.009$; $\beta=-.150, p<.001$ ）、結婚経験が有意な正の影響（ $\beta=.171, p<.001$; $\beta=.158, p<.001$ ）を与えており、年齢が進むにつれて肯定率が低くなり、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向がうかがえた。また、「経済的利点」「上記に該当する理由はない」については、結婚経験が有意な負の影響（それぞれ、 $\beta=-.124, p=.012$; $\beta=-.139, p=.004$ ）を与えており、結婚経験があると肯定率が低くなる傾向がうかがえた。そして「相手に押し切られた」では年齢と結婚経験の交互作用が有意となり（ $\beta=.107, p=.007$ ）、単純傾斜分析の結果、独身群では年齢が進むにつれて有意に肯定率が低下する一方（ $\beta=-.126, p=.016$ ）、結婚経験群では有意ではないが年齢が進むにつれて有意に肯定率が上昇する傾向がうかがえた（ $\beta=.108, p=.122$ ）。なお「家族・知り合いに押し付けられた」では、有意な独立変数は見いだされなかった。

Table 11

結婚の理由：年齢

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	20	42	56	77	195
	はい	14	32	27	32	105
独身	いいえ	70	42	38	24	174
	はい	29	12	10	3	54
合計		133	128	131	136	528

Table 12

結婚の理由：経済的利点

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	27	49	54	75	205
	はい	7	25	29	34	95
独身	いいえ	71	25	26	15	137
	はい	28	29	22	12	91
合計		133	128	131	136	528

Table 13

結婚の理由：相手に押し切られた

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	34	69	78	98	279
	はい	0	5	5	11	21
独身	いいえ	94	50	48	27	219
	はい	5	4	0	0	9
合計		133	128	131	136	528

Table 14

結婚の理由：子どもができたので

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	25	63	68	101	257
	はい	9	11	15	8	43
独身	いいえ	88	51	44	27	210
	はい	11	3	4	0	18
合計		133	128	131	136	528

Table 15

結婚の理由：家族・知り合いに押し付けられた

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	33	72	82	106	293
	はい	1	2	1	3	7
独身	いいえ	97	53	48	26	224
	はい	2	1	0	1	4
合計		133	128	131	136	528

Table 16

結婚の理由：上記に該当する理由はない

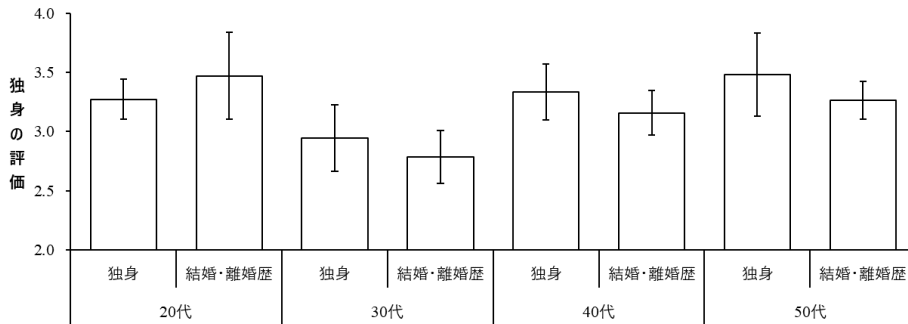
		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	21	55	59	66	201
	はい	13	19	24	43	99
独身	いいえ	52	38	25	13	128
	はい	47	16	23	14	100
合計		133	128	131	136	528

5) 独身生活に対する評価

「あなたが仮に一生涯独身であった場合、その人生をあなたはどのように評価すると思いますか」という問いに対して、「とても満足だ(5)」から「とても残念だ(1)」の Likert 尺度で回答を求めた。年代・結婚ステータスに満足度に与える影響を検討するために 2 要因分散分析を実施した (Figure 2)。その結果、年代の主効果が有意であった ($F(3, 520)=8.188, p<.001, \text{partial } \eta^2=.045$)。Holm 法による多重比較の結果、30 代が他のすべての年代に対して満足度の平均値が有意に低いことが見いだされた (adjusted $p<.01, d=0.565\sim 0.422$)。

Figure 2

あなたが仮に一生涯独身であった場合、その人生をあなたはどのように評価すると思いますか



Note: エラーバーは標準誤差を示している。

6) 恋愛・結婚で思い浮かぶ言葉

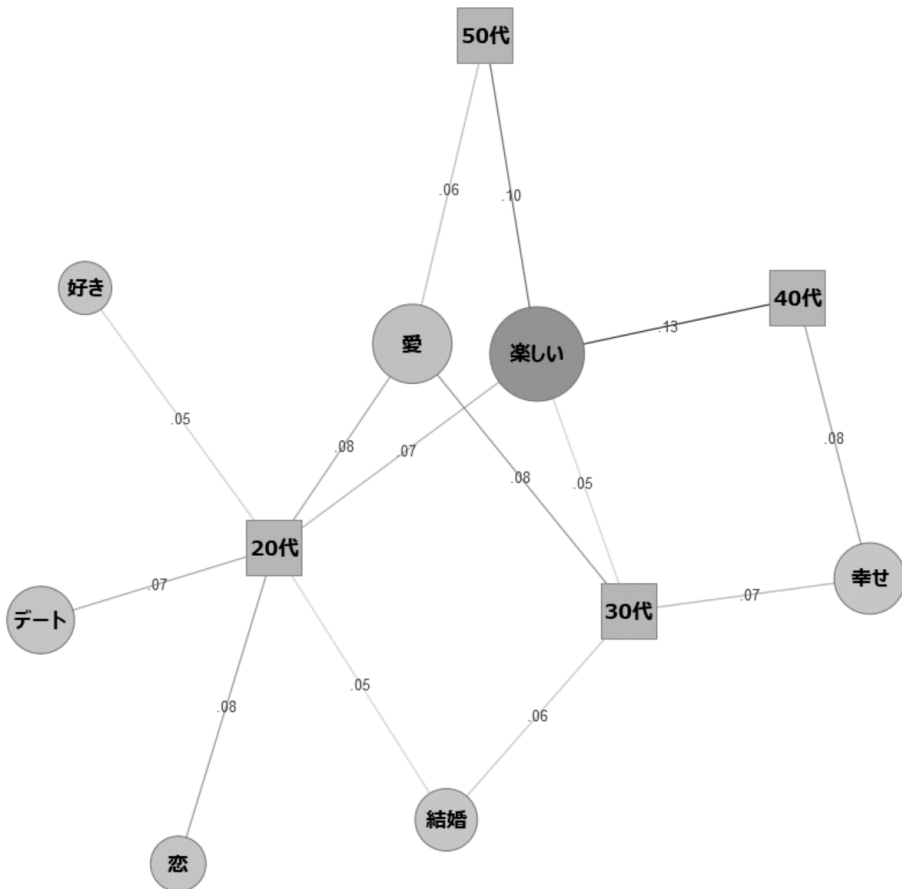
恋愛連想語に対してテキストマイニングを行った。固有名詞などを除く 395 の自立語が抽出され、出現頻度が高いものから順に「楽しい(66)」「愛(46)」「幸せ(37)」「デート(33)」「結婚(28)」「恋(22)」「幸福(21)」「好き(20)」とポジティブな印象の語が続いた。これら出現回数が 20 以上の 8 語の年代別出現頻度を示すために共起ネットワーク分析を行った (Figure 3)。全体の出現頻度の高い「楽しい」「愛」が各年代に共通する連想語であることが見て取れる。20 代では「好き」「デート」「恋」、20~30 代では「結婚」、30~40 代では「幸せ」が連想されやすいことが見いだされた。

結婚連想語も同様の分析を行った。370 の自立語が抽出され、順に「生活(49)」「家族(45)」「子ども(45)」「幸せ(41)」「忍耐(40)」「我慢(36)」「愛(22)」「安心(21)」「安定(20)」と続いた。これらの出現回数が 20 以上の 9 語の年代別出現頻度を示すために共起ネットワーク分析を行った (Figure 4)。「家族」が全世代に特徴的な語であることが見て取れる。また、20~30 代に特徴的な語が「幸せ」であるのに対し、40~50 代では「忍耐」「我慢」「安心」「安定」と、年代によって結婚のイメージが異なることも見いだされた。

7) 専業主婦の魅力

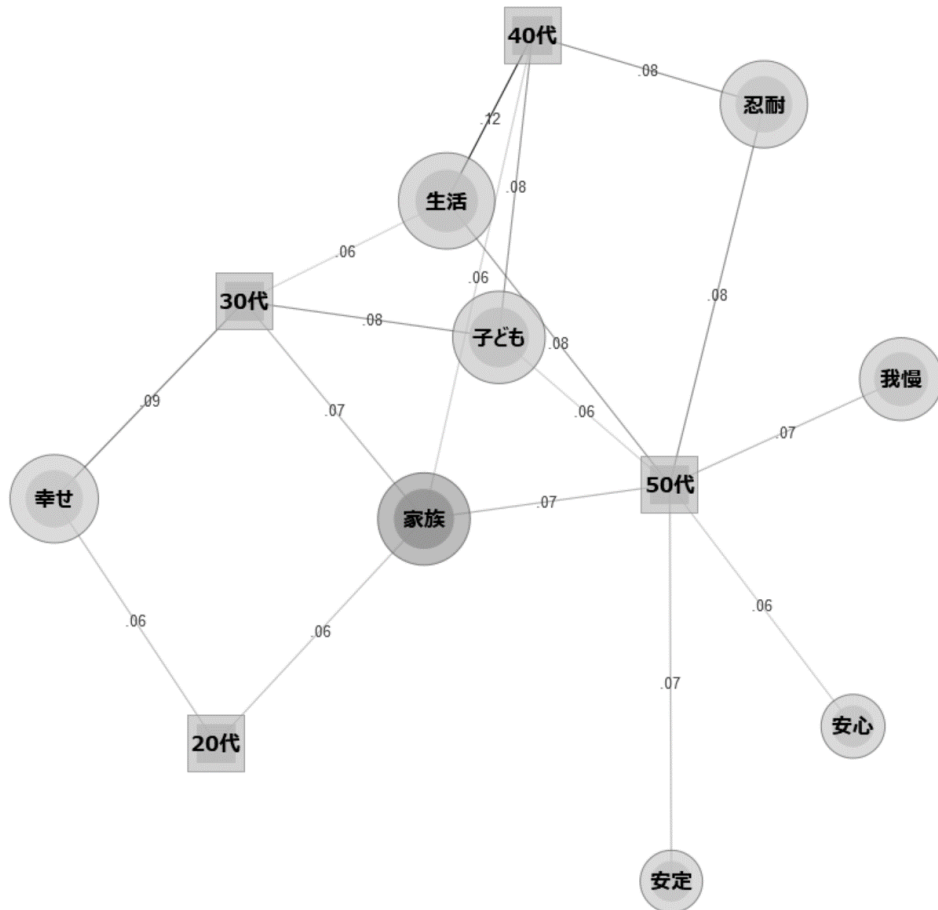
年代と結婚経験の有無で分割して多元クロス表を作成した (Table 17)。年齢、結婚経験および交互作用を独立変数、回答を従属変数とした重回帰分析(頑健標準誤差を使用)を行った結果、交互作用が有意となった ($\beta=.136, p=.002$)。単純傾斜分析の結果、独身群では有意な年齢の影響は見られない ($\beta=-.084, p=.212$) のに対し、結婚経験群では年齢が進むにつれて有意に肯定率が高くなる傾向 ($\beta=.196, p<.001$) がうかがえた。

Figure 3
恋愛で思い浮かぶ言葉（年代別）



Note: ノードの数値は Jaccard 係数を示している。

Figure 4
結婚で思い浮かぶ言葉（年代別）



Note: ノードの数値は Jaccard 係数を示している。

Table 17
専業主婦になりたい（続けたい）ですか

		20代	30代	40代	50代	合計
既婚・離婚	いいえ	21	48	41	45	145
	はい	13	26	42	64	155
独身	いいえ	69	37	41	19	128
	はい	30	17	7	8	100
合計		133	128	131	136	528

考察

本研究では、結婚制度の差別構造を分析する指標「Maridex」を作成するための予備調査として、20代～50代女性を対象として結婚に関連する意識・態度を訊くオンライン調査を行った。20代の平均年齢が期待値より有意に高いことは見いだされたものの、その他人口統計学的変数の動向をみると今回の調査は妥当に実施されたと考えられる。

以下、結婚に関連する意識・態度に関する質問について考察を行う。

1) 結婚と収入をめぐる態度

「もし、あなたに十分な収入があり、パートナー（夫）が専業主夫になりたいと言い出したら、どうしますか」という問いに、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向については、未婚者（そしておそらく若い年代が多いだろうと想定できる）については、「結婚するなら相手が仕事を継続してくれることが大前提」という意識があり、逆に既婚者であれば、「自分が仕事を続けるならば家事と仕事の両立が厳しいが、もし相手が家事をしてくれるならそれもいいかも」という考えが表れていると想定できる。「専業主婦になりたいか」という問いに、結婚経験群では年齢が進むにつれて有意に肯定率が高くなる傾向があるのも、「仕事と家事の両立が大変だから、いっそのこと家事に専念したい」という気持ちの表れかもしれない。若者が「結婚相手は仕事の継続が前提」という傾向は、結婚生活の金銭的負担の大きさへの懸念が影響しているのかもしれない。「経済的に全く不自由のない生活が保証される場合、性格が合わない相手とでも結婚したい」という問いに、年齢が低いと肯定率が高いという傾向があるのは、若者にとって「結婚はしたいものではあるが、金銭的負担の大きいことだ（だから、経済的保証があるなら悪くないかも?）」という認識があり、それが「専業主夫を否定する」傾向につながっているとも考えられる。また、同じ問いに結婚経験があると肯定率が高くなるのは、そのような若者の「結婚に対する憂い」が本当である可能性を示唆しているのかもしれない。

2) 結婚に対する態度

「パートナー・夫（になる人）に、雨の日には疲れていても駅まで迎えに来てほしい」の質問は、「即時的対応」が求められる、かなり親しい友人でも頼みづらいことを尋ね、結婚相手への見返り要求の高低を探ったものである。「パートナー・夫（になる人）を得ることで、自分の人生の幸福の半分以上は得られる」の質問とともに、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向があったが、前者は「結婚への金銭面以外の期待」を表し、後者も「金銭面だけではない幸福」を期待していると考えられる（ただし、後者に関しては、「金銭的幸福だけでは、人生の半分以上を占めない」という前提の下で成り立つ）。つまり、結婚への金銭的負担の懸念が大きい若者がいる一方で、結婚すると「金銭面以外の利点」を実感する、それが日本の結婚の姿なのかもしれない。

3) 結婚の理由

結婚した理由については、「年齢」および「子どもができたので」という理由が、年齢が進むにつれて肯定率が低くなり、結婚経験があると肯定率が高くなる傾向があるが、これは、特に年齢が高い女性は時代のこともあり「年齢・子どもができたせいで結婚した」とは認めたくない一方、実際には「子どもができたから結婚した」というカップルが増えている実態を表した複雑な心境だと考察される。「経済的利点」についても、結婚経験があると肯定率が低くなる傾向があるのは、同じ理由で「認めたくない」のかもしれない。しかし、20歳代の若者にとって「でき婚」はふつうにみられる結婚の形態なので、若い世代はどれも肯定率が低くならないのではないだろうか。『人口動態統計特殊報告』『令和3年度 出生に関する統計の概況』（厚生労働省, 2021）

によると、平成7年以降から、第1子出生までの結婚期間のピークは6か月であり、「嫡出第1子出生」に占める割合は令和元年で18.4%であるが、現在の20代（2000年前後生まれ）が子どもだった時代は、実に23-27%がいわゆる「でき婚」である。このことから、若い世代は「子どもができたから」結婚することを普通だと思っている可能性がある。

4) 独身生活に対する評価

「あなたが仮に一生涯独身であった場合、その人生をあなたはどのように評価すると思いますか」という問いに対し、30代が他のすべての年代に対して満足度の平均値が有意に低いのはなぜか。これは、女性にとって、30代は仕事も大事な時期であり、子どもを持つこと（出産）を含めたライフプランニングの重要な時期であるからではないだろうか。40代になれば「妊娠・出産」に関してはある種の決断（諦観）をする、あるいはしていることが想定されるが、30代ではまだその葛藤の渦中にいるかもしれない。逆に20代ならば、まだ「しばらく独身を楽しむ」と決断を先送りすることも可能だ。つまり、女性30代にとっての「独身」は、「葛藤の時期」なのである。このような理由から、30代の独身の評価が低いのではないだろうか。

5) 恋愛・結婚で思い浮かぶ言葉—恋愛・結婚のイメージ

「恋愛」から連想された語に対してテキストマイニングを行ったところ、全体的にはポジティブなイメージの語が多く、「楽しい」「愛」が世代に共通するイメージであった。情緒語に着目すると、20代では「好き」「恋」といった急激で一時的な情動（emotion）が、30～40代では穏やかな「幸せ」という気分（mood）がイメージされており、年齢あるいは世代の影響が考えられる。一方、イベント語に着目すると、20代では「デート」という非制度的なイベントだったものが20～30代には「結婚」という制度的関係に連合が移行する様子が見えてくる。同時に「恋愛結婚」という社会的現実ないしは共同幻想が現代日本の文化に強固に維持されていることも示唆される。

また「結婚」については、20～30代に特徴的な語が「幸せ」というポジティブな情緒語であったのに対し、40～50代では「忍耐」「我慢」「安心」「安定」が連想されやすい語であった。結婚の理由に経済的利点を挙げた女性が一定数いたことを考えると、「経済的な安心や安定」を示しているのかもしれない。その対価として「忍耐」「我慢」といったネガティブな情緒を支払っているのではないかと考えることも可能であろう。

6) 本研究の問題点

分析上の問題点のひとつとして、多くの変数で年齢と結婚経験について線形回帰モデルを用いて検討した。厚生労働省の人口動態統計にもとづくと、女性の平均初婚年齢は30歳を超えたが、分布のピークはここ四半世紀20代後半で安定しており、20代、30代に特異的な結婚に対する意識・態度をとらえるには、もしかすると線形モデルによる分析は不十分かもしれない。クラスター分析や決定木分析など非線形モデルを用いた分析がさらなる知見を提供する可能性が考えられる。

7) さいごに：public significance statement として

本研究は、日本の女性の結婚に関する意識や態度を調査し、結婚制度が女性差別の構造的要因であるという仮説を検証するための指標「Maridex」を開発することを目的とした。本研究の知見は、日本におけるジェンダー平等の促進に向けた政策的示唆を提供する。また、結婚制度が女性の社会進出や幸福感に与える影響を明らかにし、結婚制度の改革や多様化の必要性を示すことで、社会的な課題に対処することが可能である。さらに、恋愛や結婚に関する価値観が女性差別の源泉であるという新しい視点を提供し、社会的な変化を促すことが可能である。

引用文献

- 相原 征代 (2016). 男女不平等としての結婚—日本とフランスの比較から— 藤田 尚志・宮野 真生子 (編) 愛・性・家族の哲学③—家族 (pp.38-66) ナカニシヤ出版
- Giddens, A. (1992). *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love & Eroticism in Modern Societies*. Polity Press.
(ギデンス, A. 松尾 精文・松川昭子 (訳) (1995). 親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム— 而立書房)
- 樋口 耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析 —2 つのアプローチの峻別と統合— 理論と方法, 19, 101-115. <https://doi.org/10.11218/ojjams.19.101>
- Illich, I. (1981). *Shadow work*. Marion Boyars
(イリイチ, I. 玉野井 芳郎・栗原 彬 (訳) (2006). シャドウ・ワーク：生活のあり方を問う 岩波現代文庫)
- 厚生労働省 (2021). 令和3年度 出生に関する統計の概況 Retrieved August 3, 2023 from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/syussyo07/dl/02.pdf>
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育、研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73. <http://hdl.handle.net/11150/10815>
- 上野 千鶴子 (1990). 家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平 岩波書店
- World Economic Forum (2022). Global Gender Gap Report 2022 Retrieved August 4, 2023 from https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2022.pdf

資料：本研究の調査で用いた質問項目

※選択肢など詳しい項目内容については、<https://forms.gle/PYhhGLG7CaZHZPU7> を参照のこと。

- ・ あなたの年齢を教えてください。
- ・ 結婚生活は通算でどのくらいありますか。
- ・ 離婚経験はありますか
- ・ あなたのお子さんの人数を教えてください。
- ・ 同居している家族を教えてください。
- ・ あなたが最後に卒業した学校（在学中を含む）を選んでください。
- ・ あなたの現在のお仕事に当たるのはどれですか。
- ・ あなたの世帯全体の昨年1年間の収入はおいくらぐらいですか。
- ・ あなた自身の昨年1年間の収入はおいくらぐらいですか。
- ・ 経済的に全く不自由のない生活が保証される場合、性格が合わない相手とでも結婚したい。
- ・ もし、あなたに十分な収入があり、パートナー（夫）が専業主夫になりたいと言い出したら、どうしますか。
- ・ あなたは、以下の考えについてどう思いますか。 / パートナー・夫（になる人）に、雨の日には疲れていても駅まで迎えに来てほしい。
- ・ あなたは、以下の考えについてどう思いますか。 / パートナー・夫（になる人）を得ることで、自分の人生の幸福の半分以上は得られる。
- ・ あなたは、以下の考えについてどう思いますか。 / パートナー・夫（になる人）と離婚することもありえる。

- ・ あなたが結婚した理由に含まれるもの（結婚していない方は、もし結婚すると仮定した場合の理由）を以下から選んでください。
- ・ あなたが仮に一生涯独身であった場合、その人生をあなたはどのように評価すると思いますか。
- ・ 恋愛で浮かぶ言葉を「単語で3つ」答えてください。
- ・ 結婚で浮かぶ言葉を「単語で3つ」答えてください。
- ・ 専業主婦になりたい（続けたい）ですか。

[付記]

本研究は、2022年度北陸大学特別研究助成（奨励課題研究）の支援を受けて実施されたものである。